

2000年度卒業論文要旨

富士山を象徴とする環境保護活動——富士山クラブを例に——

玉井 靖子

富士山はよく「日本の象徴」とか「日本人の心のふるさと」といわれる。しかし、調べてみるとそれらの富士山イメージは明治期に意図的に創られたものようだ。そのイメージを使い、昨今問題となっている富士山の環境問題に取り組む場合、その“環境”の意味は少し異なってくるのではないかと思った。そしてこのようなイメージによって地域間で環境保護活動の姿勢に差が出てきてしまうなら、それは考えるべき問題なのではないかと思う。本論文では、NPO富士山クラブと、その活動をバックアップしている毎日新聞社の富士山再生キャンペーンに焦点をあて、富士山イメージが環境保護活動の中でどのような面でプラスに働き、どのような面でマイナスに働いているかを考察する。

富士山クラブも富士山再生キャンペーンも最初に述べたような富士山イメージを用いているが、

富士山クラブは、富士山の湧水を守る団体を前身とし、関係者や理念もそこから引き継がれており、富士山の環境問題を、自分たちの生活と密着したものと見ているようだ。一方、富士山クラブの富士山清掃登山に参加した一部の方にとってアンケートによると、参加者の側は、最初に述べた富士山イメージを抱いて参加しに来ていることが分かる。

富士山のイメージを使うことで確かに人も資金も集まり、その点では多くの環境保護団体が抱える問題は解決されるかもしれないし、イメージアップを狙う企業と連携することで、企業・行政・市民の協力によって環境保護を進めていくというグラウンドワークという形態にとっては非常に有効だ。しかし、この団体の側と参加者の意識にギャップが見られ、これをなくすことが、より良い問題解決へつながると考える。

開発・国際協力NGOと女性
——日本のNGO：アジア女性自立プロジェクト (AWEP) の事例から——

(総合人文科学コース) 富山 ころろ

世界中で国際協力活動を行うNGOは近年日本でも社会的存在として定着しつつある。中でも、特にアジアの女性への自立・生活支援を行っている日本のNGOはどういった観点から、どんな社会を目指して活動しているのか。筆者は、神戸市鷹取地区にあるNGO「アジア女性自立プロジェクト(AWEP)」における参与観察調査をもとに、日本人女性とアジアの女性たちとの関係、草の根の支援活動の可能性を大局的に考察した。

AWEPは主に、現地NGOとの連携によってフィリピンからの出稼ぎ女性労働者の帰国後の自立支援、タイ・インドネシアの女性たちとのフェアトレード、在日外国人女性の生活支援を行い、日本人を含めた女性のエンパワーメントを目指している。

この活動は70年代以降の国際的な女性運動の

高揚の中で、アジア地域の女性たちのネットワークが強まってきたことと、80年代以降の経済のグローバル化による出稼ぎや買春の海外波及とに深く関連している。年間80万人に登る海外出稼ぎ労働者のうちアジア女性の占める割合は高く、性産業への就労や子供の国籍問題などが大きい。

先進国の経済活動にとどまらず、人権・開発・南北・環境とが複雑に絡み合いグローバル化する問題には、グローバルな視点での総合的支援が必要である。政府の二国間援助ではない、対等なパートナーとしての柔軟なNGOの活動と草の根の女性とのつながりが、今後のアジア地域の横の連帯を築く基盤になるのではないだろうか。そのためには日本人女性自身のエンパワーメントと在日外国人とのよりよい共生関係も不可欠であろう。